

令和3年度 第3回子ども部会 議事録

日 時：令和3年12月10日（金） 11:00 ～ 12:30

場 所：奄美市市民交流センター 3階大多目的室

参加者：大瀬（愛かな）、程（ここ）、竹田（のぞみ園）、福田（にこびあ）、松尾、直（ハートリハ龍郷）、西（はごろもの郷）、前山（ヒマワリクラブ）、森岡（ヒマワリ就学塾）、赤塚（聖隷かがやき）、永井（相支：のぞみ園）、藤山（大島養護）福山（県療育C）、吉川、田邊（名瀬保健所）、師玉（奄美市福祉政策課）、川畑（笠利いきいき健康課）出田（瀬戸内町保健福祉課）、貞、（龍郷町保健福祉課）、福崎、岡山（びあリンク奄美）

※敬称略 計 21 名

1.参加者自己紹介

2.事務局より

○活動報告（9月～12月の活動）

- ・9/10（金）：第2回子ども部会
- ・10/15（金）：中部地区子ども支援 net
- ・10/22（金）：第3回そだちサポート勉強会（事例検討会）
- ・11/19（金）：第4回そだちサポート勉強会（事例検討会）



3. 協議/意見交換

①各市町村より、各市町村の障害児福祉計画（龍郷町：子ども療育計画）の進捗状況について

※大和村、宇検村は欠席

【奄美市】

- ・計画実施状況としてはまだあまり進んでいない。今後も要望や意見を取り入れながら、計画を進めていく。それぞれの事業所にも協力をお願いしていきたい。
- ・質の向上に向けた取り組みとして、研修など、自立支援協議会と連携していきたい。
- ・まずは、ニーズ把握や体制整備に取り組んでいきたい。（社会資源の把握なども含む）
- ・医的ケア児の保育所等での受け入れについては、受け入れに対する意識がまだ浸透していない
⇒障がいがある子どもさんが、保育所や幼稚園に入りたいと要望しても、「装具をつけているから」「療育に通所しているから」という理由で断られたことがあったと聞いている。
- ・保育所や幼稚園と情報交換しながら、受け入れに対する意識の拡大を図っていく必要がある。
- ・発達検査等については、県の療育等支援事業を受けているチャレンジサポート奄美発達療育相談や、保健所の行っている発育発達クリニックなどを活用しているのが現状。市町村でもなにかできないか模索しているところである。
- ・相談員へのつなぎ、対応など、どこにつないだらいいか一緒に考えていく体制を構築していきたい。

【瀬戸内町】

- ・子どもさんの支援については、ここ園との連携に力を入れている。
- ・保育所と療育の併行通園はスムーズだが、幼稚園からは難色を示されることがある。
- ・幼稚園利用の希望がある場合、どういう風に幼稚園と連携していけばよいか課題

- ・親子教室からの療育へのつながりについては、3歳児くらいまでになると家族も不安を感じることがあってつながりやすいが、1歳半くらいだと、支援者は気になるけれど、家族が支援の必要性について受け入れにくい現状がある。（気になるお子さんたちの家族との関係が作りにくい）
- ・医的ケア児については、今まではあまりいなかったが、今年度はケースの情報（超未熟児出産）が入ってきている。
⇒現在は、母親が育休を延長して自宅で見ているが、その後、仕事復帰されたときの対応をどうしていくか検討が必要。
- ・医的ケア児について、保育所での受け入れは、現時点では難しいと感じている。今後、保育所の先生方への障害理解を深める取り組みや、研修の機会が必要とは考えているが、少ない現状がある。
- ・ペアレントプログラムなど、町内で、実施できる人がいないので、子ども部会で研修をしてもらえるとありがたい

【龍郷町】

- ・令和3年度は、放デイ利用が増。（親子教室から、支援に繋がるという流れと思われる。）
- ・今年度は、コロナで親子教室や親子サロンの開催が難しかったため、療育が必要な子の拾い上げが、難しくなっている
- ・新規受け入れについては、どの事業所も、いっぱいになっている。（課題と感じている）
- ・保育所等訪問について、事業所と学校で壁があるという話が以前から出ていた。今後、教育委員会等も含め、「顔が見える連携」を作るための機会を持つ必要があると考えている。
⇒来年度から、町内の関係機関（療育、学校、保育所等）の「顔が見えるネットワーク」や「連携がとりやすい地域づくり」を目指し、「龍郷支援ネット」という名称で、話し合いの場を作るための準備を進めている。自立支援協議会でも、各地区で子ども支援 net を開催しているが、今回の「龍郷支援 net」は龍郷町の中で、各機関が相談しあえる連携体制をつくることで「お互いの困り感」や「他機関の好事例」の共有に繋がればと考えている。
- ・医的ケア児コーディネーターについては、圏域で確保されているが、事業所等とも相談しながら、できれば町単独でも設置したい。

②意見交換

【医療的ケア児の支援/並行通園等について】

- ・低体重出産などの場合、鹿児島県の病院などに入院していることも多い。地域に帰ってくる際には、事前に体制を整えておく必要があるが、退院直前にならないと情報が入ってこないのが現状。
⇒医療などから早い段階で情報提供していただけるような連携体制が必要
- ・併行通園の事例があっても、週5は、福祉サービスの事業所で残りの時間だったらみられるというところが多い。
- ・自分で装具をつけられる子どもでも、「装具を使用している」という情報だけで二の足を踏まれてしまう。（保育所からは、面談後に対応を検討と言われることがある。）
- ・保育所や幼稚園の「療育に対するイメージ」「人員の問題」などの課題があり、難しくとらえられている。⇒そんなに難しいことではないと、説明しながら、一緒に考えていくことが必要
- ・療育を利用していた子どもさんが、保育所を利用したいという時には難しいことが多い。（逆の場合は、スムーズなことが多い）⇒相談支援専門員だけの調整には限界があるので、保健師さんと連携をとっている。
- ・家族が「将来的には地域の学校に通学させたい」との思いがあり、保育所との並行通園に向けて、手続きを進めた。保育所での面談時、装具の着用状況も確認して問題ない様であったが、「何かあったら…」と断られてしまった。（事前に役所から保育所に連絡していたのにも関わらず断られたことで家族はショックを受けていた。）⇒結果的には他の保育所で受け入れてもらった。
- ・経口管理が難しい子どもに対して、保育所に訪問看護が入って、チューブで水分、おやつ等を注入する等の支援を行っている事例もある。

【保育所/幼稚園/学校との連携について】

- ・子どもさんの状態や、家族の希望により、療育への通所日を徐々に減らし、保育所の日数を増やしていくなど、段階を踏んで取り組んでいる。
- ・療育手帳の申請について、手帳を取得することで、職員の加配がつくことから、保育所側から取得を勧める傾向がある。
- ・児童発達支援から就学への流れが把握しにくい。

⇒**教育委員会から、就学の流れを確認できる機会があれば、共有しやすいのでは。**

- ・学校側の障害理解が足りていないと感ずることがある。
 - ・「こうあるべき」という考えが抜けにくい先生もいる（学校側の障害に対する理解も必要。）
 - ・うまくいっていても、担任や担当が変わることで、うまくいかなかったという事もある。
 - ・学校によっては、加配の先生が未配置だったり、人が足りないなど支援学級の人手不足が顕著に感じられる場合もある。
 - ・保護者と対立してしまう状況は、先生も困っている。保護者と先生の話がくい違ふこともある。
 - ・「保育所等訪問支援事業」では、学校側の壁を感じることが多い。保護者から依頼され、日程について学校と調整しようとしたら、「運動会がある」「〇〇がある」と行事を理由に、受入れてもらえないことがあった。
 - ・学校や保育所/幼稚園の先生方もがんばっている。
 - ・送迎時に、熱心なコーディネーターの先生だと情報交換もスムーズに行える。
 - ・学齢期の子供との関りが難しく、特に学校の先生方と、話す機会が必要と感ずる。
 - ・「保育所等訪問支援事業」については、徐々に敷居が低くなってきたと感ずていたが、学校によって状況に差があるということがわかった。
 - ・「保育所等訪問支援事業」では、学校の受け入れのハードルが高い場合は、先生方が「評価されるのでは」という思いを持っている様子がある。その目的について、学校などに対して理解していただけるよう、教育委員会からも、伝える必要がある。⇒「指導しに行く」のではなく「情報を共有し、一緒に考える」
 - ・**小中学校の先生への、ざっくばらんな気軽な話し合いができればよい。**
 - ・**好事例（よい実践している先生の事例）を学ぶ機会を作るのもよい。**
 - ・**教育委員会と連携が取れたら学校にも入りやすいのでは。**
 - ・**相談支援専門員などと連携しながら、家族との意思疎通をしっかりとれるような連携が必要。**
 - ・**子ども達が帰った後、関係機関で話をする機会を持つことも必要。**
 - ・**学校の先生と面と向かって話したり、交流をする場は必要。**
- ⇒**龍郷の取り組みのように小さなコミュニティでできるのは良いと思う。**

【支援へのつなぎについて】

- ・検診や、発達クリニックで上がってくる子どもさんも多いが、平日は共働きの家庭もあり、利用が難しい方もいる。（事業所独自の、親子教室を月に数回土曜日に実施している。）
 - ・支援の必要性について、実態としてはあっても、保護者の受容がむずかしい場合がある。
 - ・「親子教室に来ない」「つながらない」などの困り感がある。
 - ・母親が困って相談に来て、祖父母が支援について拒否、反対することがある。
- ⇒まずは母の困りごとを聞く、解決するように保健師に動いてもらう必要がある
- ・南部地区では、行政担当とも距離が近いので、話す機会があり、親子教室からつながることはある。
 - ・子どもの成長のタイミングに合わせて療育が利用できたら良い。受け入れたいと思うのに待ってほしいといわれるとどかしい。⇒将来を考えると早期に利用できた方が良い。

【地域課題/支援の上での悩み 等】

- ・高学年では、学校から事業所に帰ってきた際、子ども達にも疲れが見られ、時間をどう過ごしてもらおうか考えてしまう。
 - ・保護者相談については、希望もあるが、相談時間の調整や、職員配置が難しい現状がある。
- ⇒専門職もおらず、それぞれの事業所だけでは限界がある。
- ・今のままのシステムでは、地域での支援が難しく、緊急性を迫られていると感じている。（土曜日の受け入れへ希望への対応や、地域の学童に通えないなど）
 - ・児童発達支援は、利用者が多く、待機待ちが多い。放デイについては、複数利用で週6日の利用希望が多く、レスパイト的になっている。
- ⇒卒業後、同じように利用できるサービスはない。将来に向けた、サービスの使い方の整理が必要。
- ・いろんな職種との連携を深めたり広げたりすることを目的とした「支援ネット」のような話し合いの場は、どの地域でも必要。
 - ・発達検査については、どの市町村も対応できる体制を整えてもらいたい
 - ・「子ども食堂」など、地域にある資源の活用も大切
 - ・チャレンジサポート奄美が委託をうけている「療育等支援事業」は、どの仕組みも対応できないような、隙間になる子どもさんの事例に対応できる。活用してほしい。

【感想】

- ・事業所では中学生が多いので、みなさんの話を聴いていて、小さい子どもの状況が知れてよかった。
 - ・保育園、幼稚園の先生方もこういう話を聴く機会が必要。
- ⇒「龍郷支援ネット」などのように地域で話す機会が増えればよい。

【行政担当者から】

- ・地域には、子どもの施設がなく、他の市町村に通っている。毎年少しずつ、事業所を利用する支援が必要な子は増えている印象もあり、地域に受け皿が必要。
- ・保育所や学校の先生も、余裕ない中で「さらに支援を」と言われて、抵抗がある印象がある。保育所や学校の先生に対して障がい理解のための、説明や研修の機会、情報提供が大事。
- ・地域に事業所が少ないため、存続についても心配している。
- ・現場職員との連携は取れているが、自治体全体として、子どもたちをどうとらえ、支えていくのかは行政としての問題でもある。⇒他の課も巻き込みながらやっていく必要がある。
- ・教育現場との連携については、確かにとりづらいつと感じている。
- ・養護学校が島内に一つしかないため、自宅から通学できず、重度の子どもが支援学級に入っている現状もある。（支援員が二人ついて支援している場合も。）
- ・もっと支援があったら伸びるのでは、という子が埋もれていないか。1～3歳児検診では見逃してしまっている子どもさんもいるため、5歳児検診が必要ではと感じている。
- ・学校、保育所は余裕がない現状だが、「保育所等訪問支援事業」を活用することで、先生方も様々な視点と余裕も生まれるのでは？
- ・就学については、福祉行政と教育委員会との連携が大切だと感じる。
- ・人が変わって支障がないように、小さい範囲から、つながっていくことが大切。
- ・親子教室に、なかなかつながらないというのは、地域の問題、周知活動をしていきたい。